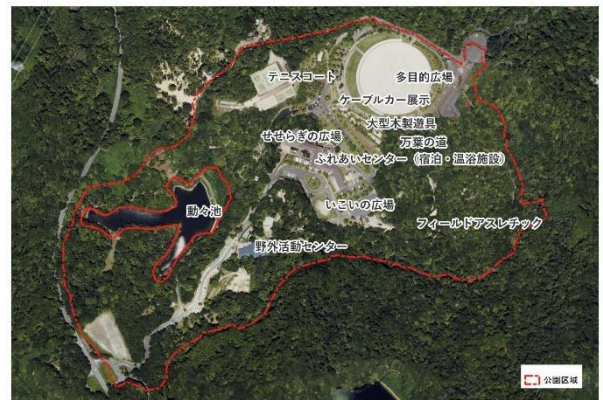


生駒山麓公園再整備基本構想(案)

1. 生駒山麓公園の基本的事項

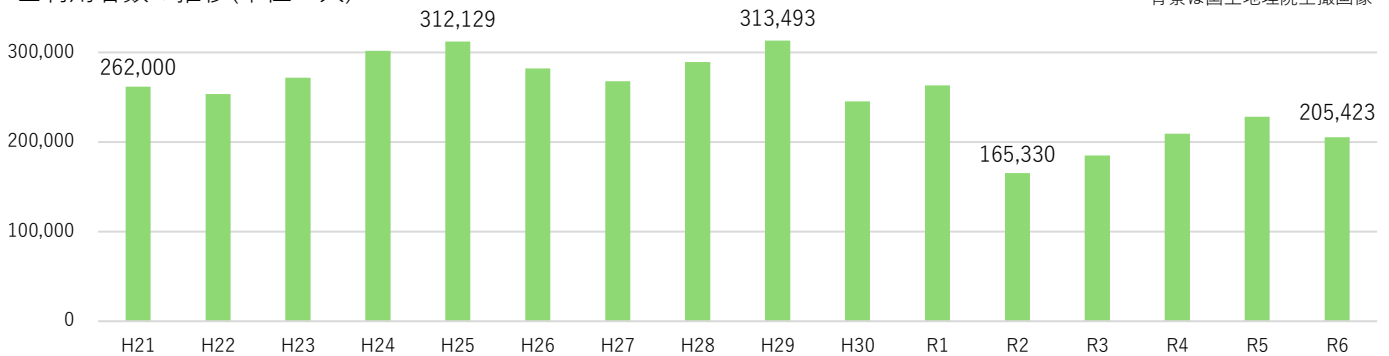
1) 生駒山麓公園の概要

名称	生駒山麓公園
公園種別	総合公園
所在地	生駒市俵口町 2088 番地
面積	約 290,000 m ² (供用面積)
整備経過	平成元年(1989)9月 計画決定 平成3年(1991)11月 供用開始
施設概要	ふれあいセンター、野外活動センター フィールドアスレチック テニスコート、多目的広場、木製遊具 万葉のみち、せせらぎの広場、駐車場
主要アクセス	《自家用車》 信貴生駒スカイライン「阪奈料金所」 より約5分 《送迎バス》 近鉄奈良線「生駒駅」より約16分



背景は国土地理院空撮画像

■利用者数の推移(単位：人)



ふれあいセンター



フィールドアスレチック



野外活動センター

2) 自然的条件、社会的条件

(1) 自然的条件

1. 地形

生駒山(標高642m)の中腹、標高約280m~380mの範囲にあり、園内で約100mの高低差があります。傾斜角が20度以上の箇所が広い範囲を占め、平坦地はほぼ建物、駐車場、多目的広場等の公園施設設置箇所です。

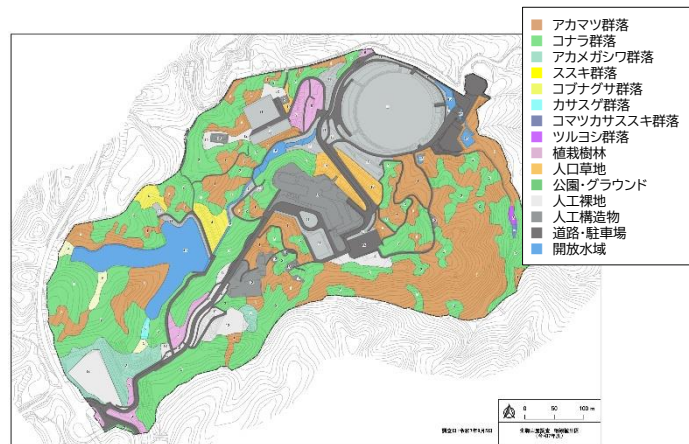
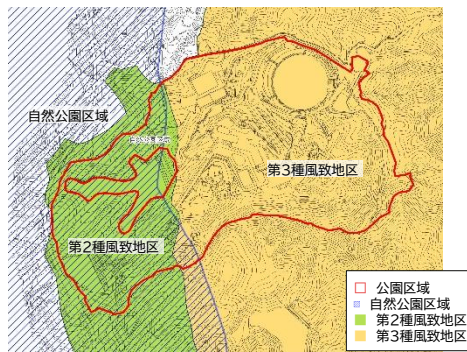
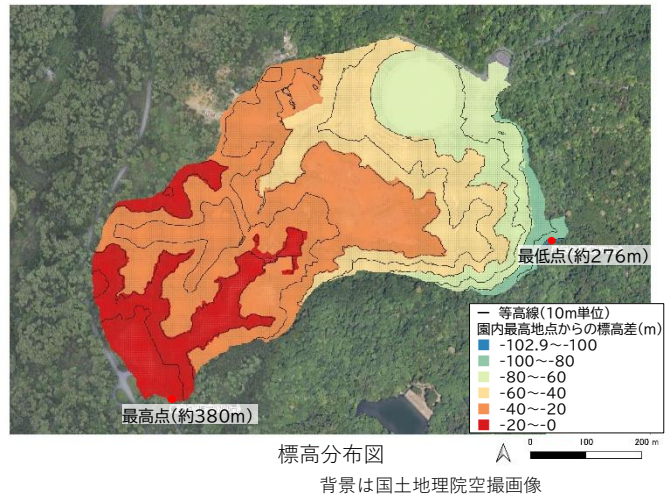
2. 植生

アカマツ、コナラのそれぞれが優占する森林植生が広く占めており、沢沿いには湿地性の植生もみられます。

森林植生は二次的自然ですが、人の手が入らずアカマツ林は衰退気味です。

3. 法規制

公園区域は、全体が市街化調整区域、風致地区(第2種、第3種)に含まれています。また、西半分は自然公園区域(金剛生駒紀泉国定公園)に指定されています。



(2) 社会的条件

1. 歴史

生駒山は古くから霊山として信仰を集め、役行者や弘法大師空海も修行したと伝えられる地です。江戸時代には宝山寺が開かれ、「生駒の聖天さん」として広く知られるようになりました。

また、本地域は交通の要衝として発展。江戸時代には、奈良と大阪を最短で結ぶ暗峠奈良街道が、伊勢参詣道として旅人に利用されました。その後、大正3年(1914)に奈良と大阪を長距離トンネル(のちの生駒隧道)で結ぶ大阪電気軌道(現：近鉄奈良線)が開通し、大正7年(1918)には生駒駅(鳥居前駅)と宝山寺を結ぶ日本初のケーブルカーが誕生しました。

このように生駒山は信仰の場であると同時に、交通の結節点としての役割が現在まで受け継がれています。



生駒山
(写真：生駒市オープンデータ)



暗峠
(写真：生駒市デジタルミュージアム)

2. 周辺施設

本公園の周辺には、近鉄生駒レジャーが運営する生駒山上遊園地や、大阪府が自然公園施設として整備した府民の森(くろんど園地、ほしだ園地、むろいけ園地、くさか園地、ぬかた園地、なるかわ園地)等が広域的に分布しています。また、生駒縦走道等のハイキングコースが複数整備されており、ハイカーやトレイルランナーからの人気も高いエリアとなっています。

3. 交通

阪奈道路等の複数の主要道路と、近鉄生駒線や生駒ケーブル等の鉄道網が整備されていることで、大阪、奈良といった周辺都市との交通利便性が高い地域です。

4. 人口

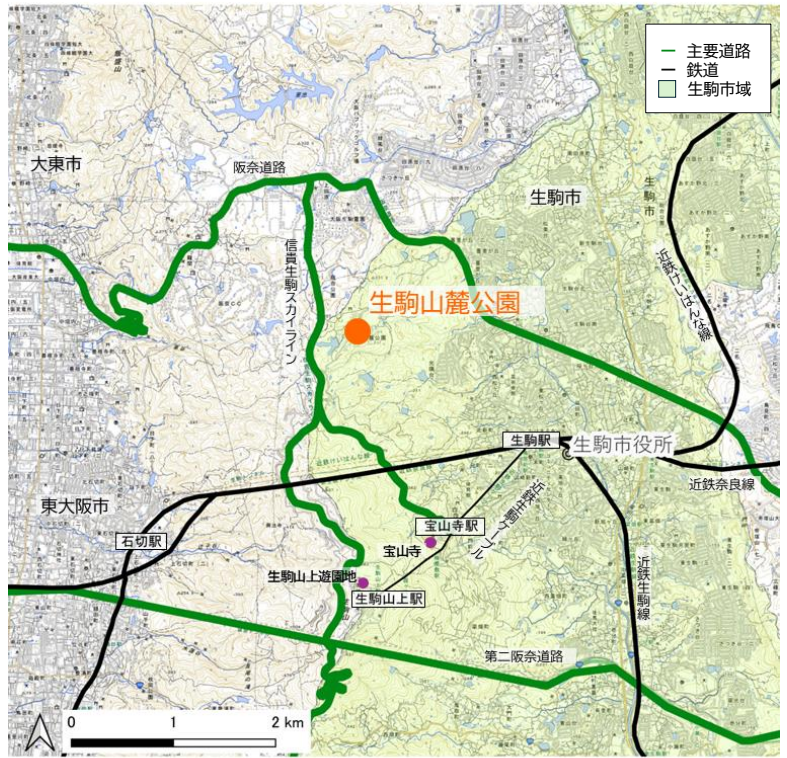
本市の人口は、令和8年(2026)年1月現在で116,171人、世帯数は52,292世帯となっており、平成25年(2013)年11月の121,350人をピークに人口減少が進んでいます。



生駒山上遊園地
(提供：近畿日本鉄道株式会社)



宝山寺
(写真：生駒市デジタルミュージアム)



山麓公園の周辺交通網図

(3) 上位・関連計画の整理

この基本構想は、公園や施設の現状と、市民や利用者、事業者等のご意見、そして本市が定める「第6次生駒市総合計画」等の上位・関連計画を踏まえて検討しました。

上位・関連計画で定められた各施策のなかでも、その実現に向けて本公園が果たす役割が大きいと考えられるものとしては、下記のものが挙げられます。

- 生駒山のブランディング (生駒市商工観光ビジョン)
- 生駒山系での健康づくり、山並みの自然に親しめるイベントの企画・開催 (生駒市緑の基本計画)
- 安心して子どもを育てられる場としての公園・緑地の充実 (生駒市都市計画マスタープラン)
- 障がい者がその希望や特性に応じて、様々な働き方を選択できるような**就労支援体制の充実**
(生駒市障がい者福祉計画)
- 森林の総合利用のため山麓公園、野外活動センターを活用する (生駒市森林整備計画)



2. 各アンケート・事業者ヒアリング結果（意識調査）

1) 利用者、市内・市外在住者へのアンケート結果

本構想の策定にあたって、各種のアンケート調査を実施し、公園を利用中の利用者255名のほか、市内在住者1,203名、市外在住者1,000名の合計2,548名からご回答をいただきました。

●認知度と利用頻度

市内・市外在住者のなかで、「本公園を知っている」と回答した人は市内では9割以上いる一方で、市外では約4割と大きな差があることがわかりました。また、利用頻度については、どのアンケートにおいても「年1回以上または数年に1回程度」という回答が最も高い結果となり、日常的に利用する公園にはなっていません。

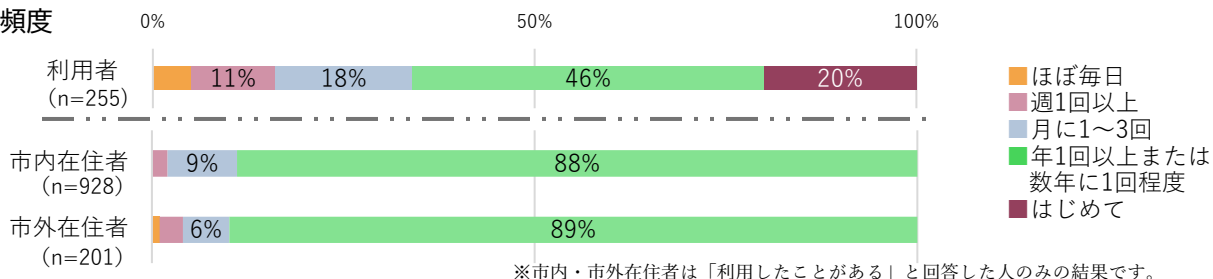
●利用目的

市内・市外在住者ともに「子どもを遊ばせる」、「自然のなかで過ごす」が利用目的の上位となりました。このことから、本公園は「自然のなかで遊ぶ場所」として多くの利用者から認識されていることがわかりました。また、現地で実施した利用者アンケートでは「ハイキングやジョギング」を目的とする方も多く、本公園のそばを通る生駒縦走道とともに、本公園が利用されている様子がみられました。

●期待すること

今後の再整備によって本公園に期待することでは、施設では「遊び場」や「飲食物販施設」に対するニーズが高く、プログラムでは「自然を活かしたイベント」や「アウトドアアクティビティ」へのニーズが高くなっています。また、双方に共通する要素として、「自然と触れ合うことへの期待」が挙げられません。

■利用頻度



■主な利用目的

	利用者 (n=255)	市内在住者 (n=928)	市外在住者 (n=201)
1位	子どもを遊ばせる (50%)	子どもを遊ばせる (53%)	自然のなかで過ごす (53%)
2位	ハイキング・ジョギング (27%)	自然のなかで過ごす (40%)	子どもを遊ばせる (35%)
3位	イベントなどへの参加 (14%)	バーベキュー (18%)	ハイキングやランニング (17%)
4位	日帰り入浴 (13%)	日帰り入浴 (17%)	バーベキュー (12%)
5位	バーベキュー (10%)	スポーツ (球技など) (15%)	レストランでの食事 (10%)

※市内・市外在住者は「利用したことがある」と回答した人だけの結果です。

■期待すること(施設)

市内在住者 (n=1,203)	
30%台	<ul style="list-style-type: none"> 新規レストランやカフェ (39%) 自然に親しめる施設や場所 (34%) マルシェや野菜の直売など (32%) 大きな芝生広場 (31%) 屋外の遊び場 (30%)
20%台	<ul style="list-style-type: none"> くつろげる屋内スペース (27%) 森や水辺を活かした遊び場 (26%) 自然・眺望などのフォトスポット (26%) 温浴施設の充実 (25%) 子どもが屋内で遊べる施設 (25%) 自然を活かしたアクティブスポーツができる場所 (22%) 公共交通機関の充実 (21%)

■期待すること(プログラム)

市内在住者 (n=1,203)	
1位	自然を活かしたイベントやプログラム (自然観察会、天体観測など)(32%)
2位	地域と連携したマルシェやフリマイベント(31%)
3位	アウトドアアクティビティ(21%)
4位	健康プログラム (ヨガ、ストレッチ教室など)(17%)
5位	親子で参加できるイベントやプログラム (絵本読み聞かせ、宝探しなど)(14%)
	水遊びイベント (14%)

※各施設に対する支持率が比較的均等であったため、20%台以上の施設についてを概ねのパーセンテージ帯ごとにまとめています。

2) 学校団体へのアンケート結果

校外学習等で山麓公園を利用していると想定される、市内小中学校の全19校に対してアンケート調査を実施しました。その結果、利用したことがあると回答した学校は半数以上であり、利用目的として最も多いのは野外活動（宿泊）という結果でした。

●利点と課題

本公園を利用してよかったこととしては、学校から近距離であり緊急時対応がしやすいこと、出入り口が管理されているため、比較的安全であることなどの意見が挙げられました。

一方、利用していない学校からは、現状の本公園の施設やプログラム内容では教育目標の達成が難しいとの意見や、児童数が多く規模に適合していないなどの意見がありました。

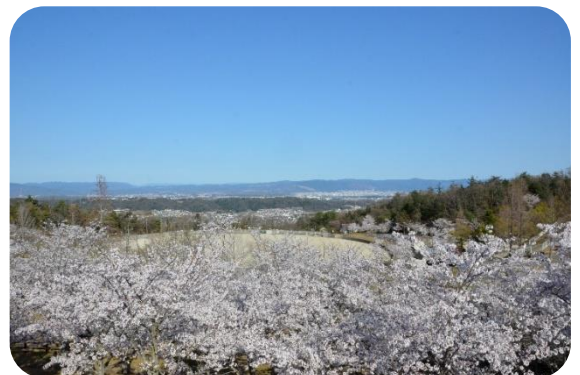
●期待すること

今後の再整備によって本公園に期待することでは「雨天時でも活動できる屋内施設やプログラムの整備」、「教育目標に適した学習プログラムや、自然を活かしたプログラムの充実」、「宿泊機能の充実」といったことに期待が寄せられました。

3) 事業者へのヒアリング結果

今後の官民連携や民間活力の導入の可能性、事業構造等に関して事業者の視点からの意見を求めるために、現在も本公園の管理運営に関係している事業者と、市外の施設運営に関わる事業者の計11社にヒアリングをおこないました。

管理・運営事業者	<ul style="list-style-type: none">✓ 動々池や多目的広場等の整備が図られれば活用できるような資源は、園内に複数存在している✓ 団体利用者以外の宿泊の一般向けニーズはあり、客室リノベーション等を行えば利用客が増加する見込みはある✓ キャンプ関連ではロッジのニーズが高く、増設することで利用者拡大につながる✓ 夏場は自由に遊べる水場が必要✓ チームビルディング等のプログラムは団体利用者からの人気が高く、利用を伸ばしていきたい✓ 重度の障がい者が活動する場として、自然が多い都市公園は、活動しやすい。一般の利用者との交流があるのも良い✓ 現状は元からあった施設の一部を障がい者向けに使用しているが、障がい者向けの独立した施設の方が、通所者が馴染みやすい
外部事業者	<ul style="list-style-type: none">✓ 見晴らしのいい山上にあることなど「ほかにはない」魅力を最大限に活かし、「ここでなければできない」体験を目玉としていくことが必要（公園管理事業者）✓ 時代の変化により不要な施設を整理することも必要（公園管理事業者）✓ 公園での公民連携事業は、民間の自由度が高い事業構造にすることで、利活用の活性化、利用者増が図れ、まちにも貢献できる公園となることが可能である（公園管理事業者）✓ 公園、宿泊施設、レストラン、温浴施設が連動したオペレーションが必要だと考えるので、「どれかの施設だけ専門事業者に依頼する」という形は、望ましくない（温浴施設事業者）✓ 運営事業者としては参画できないが、社会実験や知名度向上のイベント等であれば協力できる（アウトドア事業者）







生駒山麓公園からの眺望
(写真：生駒市オープンデータ)

3. 生駒山麓公園が抱える課題の整理

本公園が抱える現状の問題点と、それぞれに対応する解決の方向性を下記のとおり整理しました。

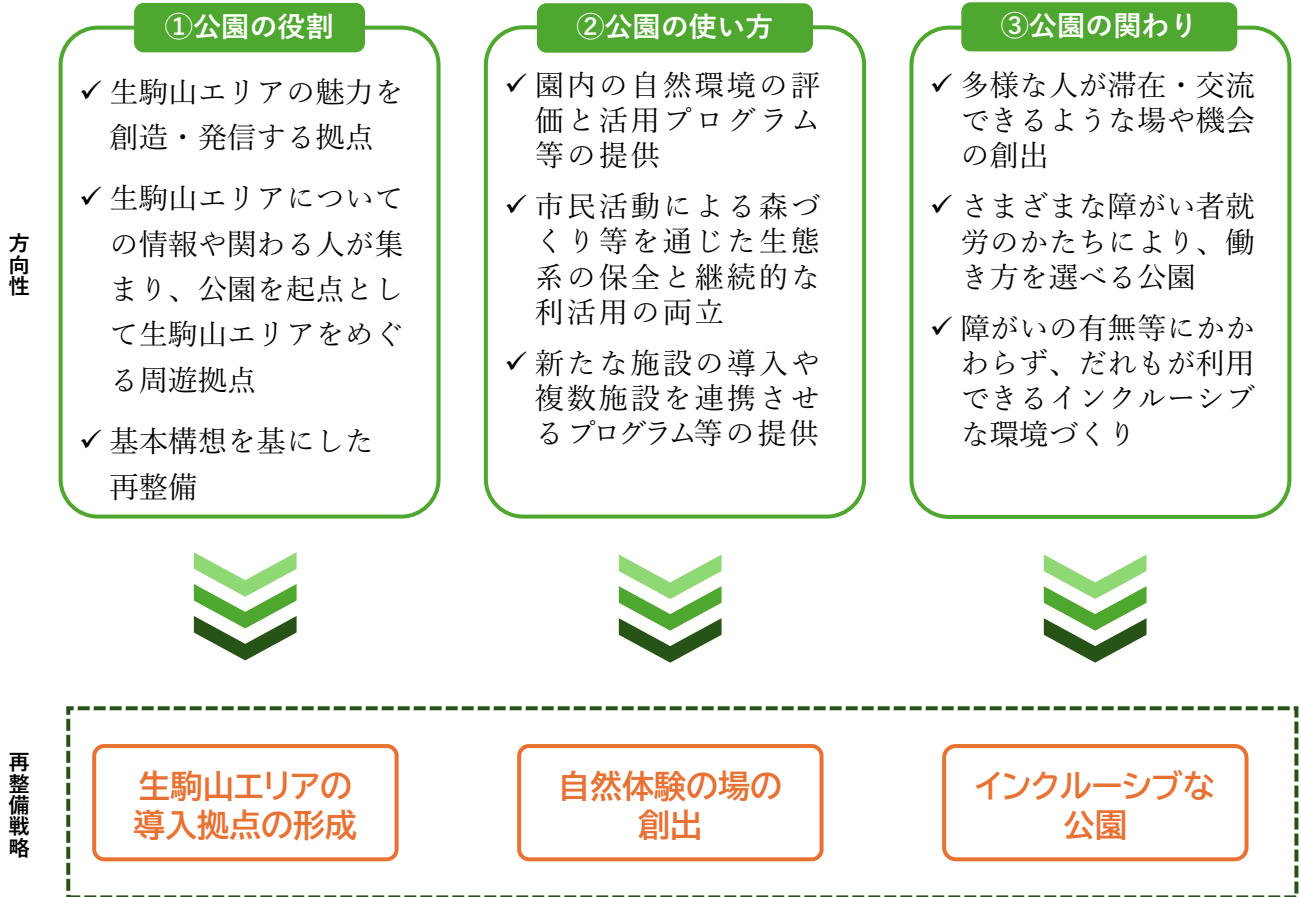
また、近年では、気候変動や生物多様性の確保、健康への関心の高まり、コミュニティの衰退等、都市を取り巻く社会的状況が大きく変化しています。こうした背景のもと、現代の都市公園には、レクリエーションの場だけではなく、気候変動への対応、生物多様性や人々のウェルビーイングの向上、多様な交流の機会の提供など、より多様な役割が求められています。

 <p>施設の問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 施設全体の老朽化 ◆ 低・未利用施設が存在 ◆ ピーク時の駐車場不足 	<p>方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 施設更新計画の策定 ✓ 基本構想を基にした再整備 ✓ 公共交通等も含めたエリア全体のアクセス改善 
<p>自然環境の問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 人の手が入らないことによる森林環境の悪化 ◆ 自然環境が、遊びや学習に十分に活用されていない 	<p>方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 市民活動による森づくり等を通じた生態系の保全と継続的な利活用の両立 ✓ 園内の自然環境の評価と活用プログラム等の提供 
<p>利用形態の問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 利用者数の減少 ◆ 年1回程度の利用しかされていない 	<p>方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 多様な人が滞在・交流できるような場や機会の創出 ✓ 新たな施設の導入や複数施設を連携させるプログラム等の提供
<p>地域共生・市民参加の問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 既存ボランティア団体のみでの活動にとどまり、新たな市民参加を促せていない ◆ 障がい者就労を前提としていない施設環境 	<p>方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 市民団体等の活動や事業者のアイデアを基にした協働・協創型の運営 ✓ さまざまな障がい者就労のかたちにより、働き方を選べる公園 ✓ 障がいの有無等にかかわらず、だれもが利用できるインクルーシブな環境づくり
<p>市全体の問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 市が生駒山エリア全体のブランディングに取り組むなかで、開園当初のコンセプトからの整理が必要となっている ◆ 公園内のみで運営が完結し、生駒山エリア全体との関係性が希薄 	<p>方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 生駒山エリアの魅力を創造・発信する拠点 ✓ 生駒山エリアについての情報や関わる人が集まり、公園を起点として生駒山エリアをめぐる周遊拠点

4. 課題等を含めた再整備戦略

先ほど整理した問題点に対応する改善の方向性を、役割、使い方、関わりの3つに分類しました。そして、この分類とこれまでに本公園が担ってきた機能や役割もふまえて、本公園の再整備において特に重視する3つの考え方を「再整備戦略」として設定します。

また、この戦略を支える基盤として、市民団体や事業者等との協働・協創による公園運営や施設更新等を進めていくこととします。



以上をふまえ、本公園の再整備戦略の3つの柱について、次にそれぞれの考え方を示します。

生駒山エリアの導入拠点の形成



生駒山の豊かな自然や眺望が楽しめ、都市部からアクセスしやすいという特性を活かし、生駒山全体を捉えた自然環境や歴史文化に触れて、新たな発見や学びが広がっていく拠点、生駒山ブランドのシンボルとして位置付け、生駒山の魅力向上に貢献します。

自然体験の場の創出



森や水辺等の豊かな自然環境を活かし、身近に自然と触れ合い、遊び、楽しむことができる体験の場を創出します。こどもから大人までの多様な人々が、自然の魅力に触れ、継続に関わることができる環境づくりを進めます。

インクルーシブな公園



障がい者就労支援等の福祉事業に先進的に取り組み、障がい者を含む多様な人々の関わりに支えられてきました。この積み重ねの上に、さらに公園管理や活動を市民や事業者等との協働・協創によって進めることで、想いや得意を持ち寄り、新しいつながりや活動が生まれていく「関わる場」としていきます。

5. 生駒山麓公園の目指すべき将来像

1) 将来像・基本方針・導入機能

生駒山の魅力を体感できるシンボルパーク － 日常の近くにある非日常的な自然体験 －

生駒山と出会い、つながる ウェルカムベース

自然のなかで遊び、学ぶ 何度も来たくなる空間

交流とつながりが広がる 自分らしく輝くステージ

再整備を通じて導入・強化する機能

■生駒山の歴史文化や自然に親しむ

- ✓ 生駒市のシンボルである生駒山エリアの歴史文化や自然に親しめる拠点となる
- ✓ ハイキングやトレイルランニング等、生駒山エリアの様々な楽しみの拠点となる

■生駒山の魅力をめぐる

- ✓ 公園と生駒駅、宝山寺、山上遊園等へのアクセス性を改善し、生駒山ブランドの魅力向上に貢献する

■園内の自然を最大活用する

- ✓ 生駒山の森林の歴史に根ざした自然の活用を通じて、森・水・生物の豊かさや多様性に触れる



■森で遊び、新たな発見にふれる

- ✓ 森や水辺を活かした遊び場や体験プログラムにより、楽しみながら子どもたちの気づきや考える力、挑戦する心などの「生きる力」が育まれる
- ✓ 四季を感じられるイベントや期間限定のアクティビティなど特別感のあるコンテンツの整備

■生駒の自然にまどろむ

- ✓ 森の中での泊まる・食べる・過ごすを通じて、自然の豊かさを体感する
- ✓ 時間の経過とともに移ろう森の空気にあまろみ、心と体がりフレッシュできる空間



■みんなの「やってみたい」をかたちにできる

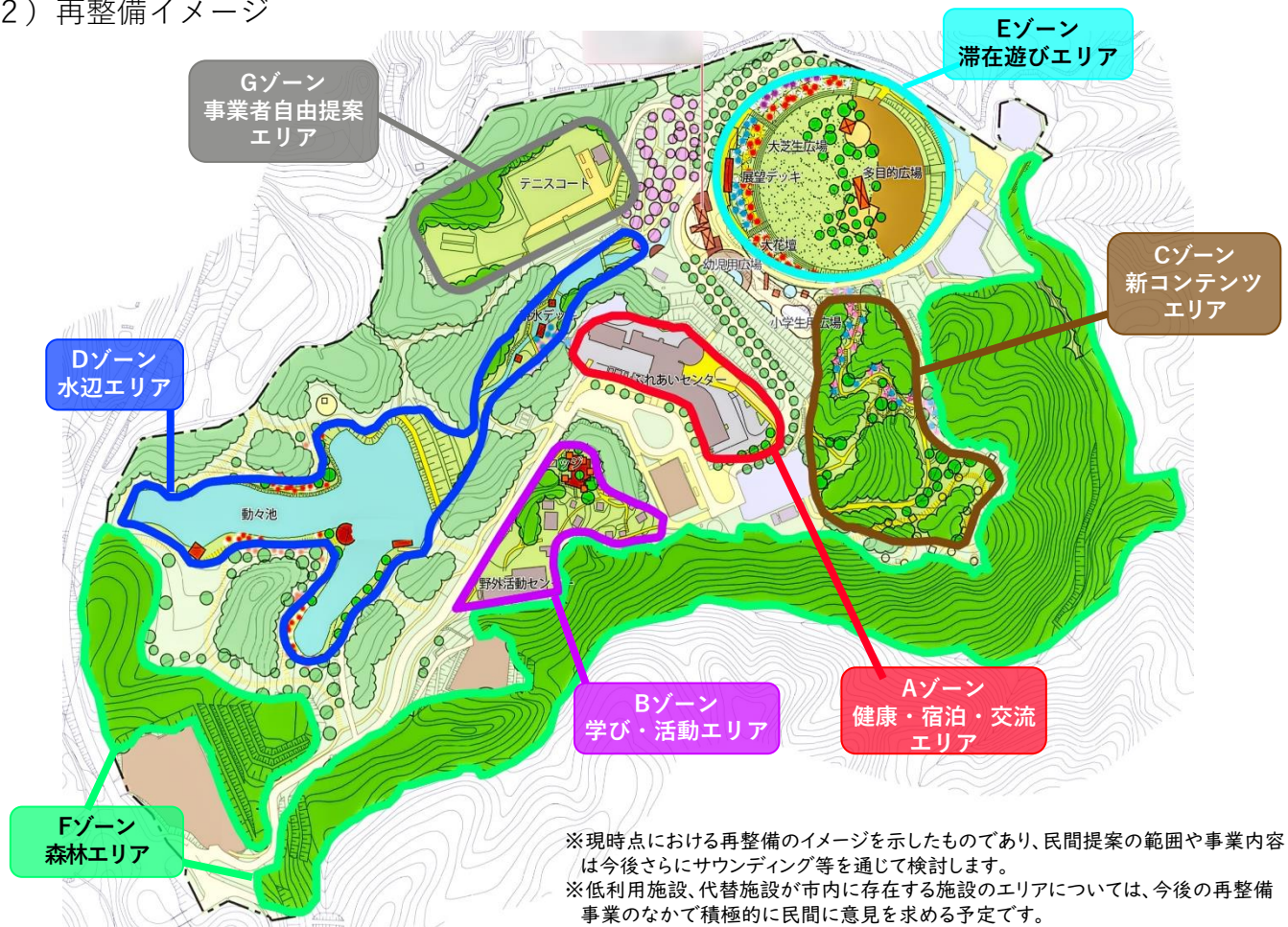
- ✓ こどもも大人も、市民も市外の人も、みんなの「やってみたい」が実現できる
 - ✓ 障がい者の社会参加や、多様な働き方の場としての包摂性を高める
- #### ■様々な主体の想いをつなぐ
- ✓ ボランティアや地域住民、公園利用者等、多様な人が公園を介した交流をすることにより、人や地域のコミュニケーションを再構築する



■みんなで育て、続けていく

- ✓ 行政だけでなく、市民や利用者、事業者らを交えたマネジメントにより、持続可能な公園経営を進める

2) 再整備イメージ



ビジターセンターイメージ



散策路イメージ

今後の事業スケジュール (予定)

令和7年度(2025)	令和8年度(2026)	令和9年度(2027)
基本構想 ✓ これからの目指す姿 (将来像・基本方針) ✓ 導入・強化する機能 ✓ 事業の大きな枠組み	基本計画 ✓ 主な施設の整備・再整備の内容 ✓ 公園の再整備の事業手法 ✓ 公民連携、市民協創手法 ✓ 全体事業のスケジュール	事業者公募 ✓ 公民連携のための事業者選定の手法 ✓ 事業者公募、選定 ✓ 必要施設の再整備 等



令和8年3月
生駒市

